2024年5月15日発行

日本国際文化学会
ニューズレター増刊号 vol.2

報告書

公開講演

『「よりどころ」の形成史』
―著者による講演会―

2024年2月26日　東北大学

日本国際文化学会事務局
龍谷大学国際学部松居研究室内

〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
TEL:075-366-2223

Email:
jsics@world.ryukoku.ac.jp

公開講演

『「よりどころ」の形成史』—著者による講演会—

月野楓子、阿部純、王霄漢、小山あゆみ

2024 年 2 月 26 日（月）の 13 時 30 分から 15 時 30 分まで東北大学大学院国際文化研究科棟 1 階 101 号室において、東北大学国際文化研究会主催・日本国際文化学会共催により、「公開講演『「よりどころ」の形成史』—著者による講演会—」を開催しました。

講師として沖縄国際大学・月野楓子准教授をお招きし、運営は東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程の阿部純、王霄漢、小山あゆみが行いました。また当日の司会を小山、「開会の辞」を阿部、「閉会の辞」を近畿大学・高橋梓准教授が務めました。

1. 東北大学国際文化研究会の紹介および講演会の趣旨（阿部純）

東北大学国際文化研究会は、2016 年 10 月に東北大学名誉教授の小林文生先生をアドバイザーとして迎え、東北大学大学院国際文化研究科の院生および研究員の有志が集まり創設した研究会です。様々な分野の人々が集まり、互いに刺激を与えながら研究生活の充実を図ることを目指して活動しており、定期的に行っている読書会や研究発表会を通して国際文化学やその関連分野、各参加者の研究に関して学際的な議論を交わしています。

これまでに研究発表会を 8 回、読書会を 60 回以上開催しました。読書会では、平野健一郎著『国際文化論』（東京大学出版会、2000 年）や、日本国際文化学会年報『インターカルチュラル』（風行社）の掲載論文、田中東子他編著『出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ』（ナカニシヤ出版、2017 年）などを読んできました。さらに、2019 年から 2020 年にかけて、キャロル・グラック著『戦争の記憶：コロンビア大学特別講義—学生との対話—』（講談社現代新書、2019 年）を扱った読書会を開いた際には、その議論を社会で広く共有するために、コロンビア大学特別講義の現場を取材した「ニューズウィーク日本版」の小暮聡子記者をお招き

当日のポスター

し、2020 年 2 月 17 日（月）に東北大学大学院国際文化研究科および日本国際文化学会との共催により、「国際文化シンポジウム」 を一般向けに開催しました。

元々は東北大学の学内研究会として始まりましたが、新型コロナ感染症の蔓延に伴い 2020 年 10 月に研究会の開催方式をオンラインに切り替えたことで、北海道大学、法政大学、筑波大学、一橋大学、京都大学、九州大学など宮城県外からも参加者を得られるようになりました。なお、本研究会のオンライン読書会の様子は、雷音学術出版『コロナとアカデミア』（2022 年 5 月）に掲載されました（阿部純、亀山光明、増渕佑亮「東北大学国際文化研究会「カルチュラル・スタディーズを読む」（2020 年 10 月-2022 年 1 月）運営報告」）。

「開会の辞」の様子

未曾有のパンデミックや初めてのオンラインツールの操作に最初は戸惑いもありましたが、地理的制約からの解放や利便性といったメリットを踏まえ、現在もオンラインで活動を継続しています。一方、大学の授業や学会が対面で再開されるようになったこともあり、公開講演として、4 年ぶりに対面での研究会を開催する運びとなりました。

公開講演の講師である月野氏は、アルゼンチンの沖縄移民（在亜沖縄移民）に関する研究成果を発表されてきました。日本のアカデミアにおいて日系移民研究は盛んに行われており、本研究会にもアメリカ、カナダ、ボリビアなどアメリカ大陸の日系人を研究対象としている参加者がいます。また月野氏の研究は、国際文化学やカルチュラル・スタディーズに関連する書籍・論文を扱ってきた本研究会の読書会におけるテーマや議論の内容とも様々な点で関連しています。そうした読書会の延長として、月野氏をお招きしてご講演いただくことになりました。

2. 講演の内容（阿部純）

講演では、月野氏の著書『「よりどころ」の形成史―アルゼンチンの沖縄移民社会と在亜沖縄県人連合会の設立―』の内容を中心に、太平洋戦争前後の背景を踏まえながら、在亜沖縄移民の生活や組織形成に関する解説がなされました。

講演の冒頭で月野氏は、在亜沖縄移民社会の「つながり」や「絆」がナショナルな言説に吸収される危険性や、沖縄出移民の文化活動や組織化の所以が「ウチナーンチュ・アイデンティティ」の強さに求められる傾向を指摘しつつ、そうした「アイデンティティ」を所与のものとして見做すのではなく、移民の営為をより具体的に検討する必要があると述べまし

た。

月野氏の『「よりどころ」の形成史』や今回の講演の内容はまさに、在亜沖縄移民の生活やそこから見えてくる沖縄文化、第二次大戦期および戦後の日本と自分自身の今後をめぐる移民たちの様々な感情と活動、男性とは異なる女性の境遇と経験、「戦前派」と「戦後派」の確執など、在亜沖縄移民社会内部の様相を――あえて「アイデンティティの強さ」等と少し距離を置きながら――具体的に検討するものでした。

講演の様子

また講演では、「よりどころ」という表現を採用するに至った経緯や、現地調査に関する問題についても話されました。月野氏は、自身が在亜沖縄移民とは異なる外部の人間という立場に加えて、「女性」の「大学院生」であるがゆえに、インタビュー調査や資料へのアクセスに苦労したと述べました。そのような性別や肩書をめぐる「壁」に直面した経験を語りつつ、フィールドワークの経験や難しさについてフロアに問いかける場面もありました。

3. 質疑応答（小山あゆみ）

月野氏の講演内容が分かりやすく、参加者の興味関心を惹くものであったため、質疑応答ではフロアから絶え間なく質問が寄せられ、会場は大変な盛り上がりを見せました。

質疑応答の具体的な内容としては、世界のウチナーンチュ大会やディアスポラという概念の適用可能性に対する月野氏の見解を尋ねる質問、在亜沖縄移民に皇民化教育が与えた影響や日本のナショナリズムとの関連性、またインタビューの方法論についての質問もありました。さらには西洋近現代史研究の観点から、人に加えてモノの移動に注目する研究に関する質問もあり、モノから歴史を見る重要性や、史

質疑応答の様子

資料とは異なる調査の難しさについて活発な議論が交わされました。

なお、性別や肩書が現地調査を進める際に大きな「壁」として立ちはだかったという月野氏の経験と問いかけに応答する形で、司会の小山からは、月野氏とはやや異なる立場から調査や研究について、以下のように話しました。

アルゼンチンと同じく南米に位置するボリビアの沖縄県系移民 2 世以降の言語継承を研究するなか、過去に母親がボリビア沖縄県系移民であったこともあり、現地の人々と知り合い連絡を取り合うまでに大きな問題には直面せず、むしろ特別な資料へのアクセスが許されることもありました。その一方で当事者との距離感をどのように保つべきかという問題や、研究遂行における主観性と客観性をめぐる葛藤もあり、自分の中ではまだ解決できていない部分が大きくあります。

在亜沖縄移民社会に加えて、インタビュー調査、資料収集、立場性等についても話し合いました！

このような小山の経験や悩みに対して月野氏は、客観性の重要性を認めつつも、当事者の主張や考え方をありのままに理解するという意味で主観もまた大切であるとの趣旨の話をされました。

本講演には移民研究のみならず、文学研究や言語学、日本宗教史、アメリカ史、ヨーロッパ史を専門とする参加者もおり、様々な観点から月野氏の研究に関する質問がありました。質問内容も月野氏の応答も大変明確であったため、講演および質疑応答は月野氏の研究や考え方を深く学ぶうえで実りのあるものでした。また、研究をめぐる立場性の問題を可視化した月野氏の経験と指摘は、今こそ我々が改めて考えるべき重要な問題だと言えるでしょう。

「閉会の辞」の様子

最後の「閉会の辞」では、高橋氏が、堀辰雄や「動詞としての文化」とも関連付けながら講演内容を振り返りました。また、何かに「よりかかる」ことで生きてゆけるという在亜沖縄移民の心理・経験は、コロナ禍における我々の経験とも実は深層でつながっているとの考えを示しました。

そのうえで、今回の講演で話された「よりどころ」とは、「アフターコロナ」の時代とも言える令和の今だからこそ考えるべき重要なテーマであるとして、「閉会の辞」を締め括りました。

4. 講演会における議論を通して（月野楓子）

拙著『よりどころの形成史―アルゼンチンの沖縄移民社会と在亜沖縄県人連合会の設立―』は、沖縄からアルゼンチンに渡航した人々が現地でどのような「社会」を形成したのかその過程を追いながら、故郷から離れて生きる人々が、移民先と故郷との関係の中でいかに生きているのかを描こうとしたものです。使用した資料はこれまで行ってきた聞き取りや収集した資料で、特別な方法はとっていません。しかし、国際文化と名の付く研究科で学んだ私にとって、使用する資料や研究の手法は関心と悩みの種であり続けてきました。そして、今回の講演会での議論を通してあらためて感じたことは、「資料を読む」ことの重要性でした。

フィールドワークでは色々な方にお話を聞かせていただきますが、本書では対象とした時代の制約から使用したのは主に刊行されている文字資料です。話を聞くことと資料を読むことは別の作業であるとはいえ、執筆の過程では、目は文字を追いながらも誰かの声を聴いているような感覚にとらわれたことも少なくありませんでした。人類学などで用いられる「肩越しの視点」はフィールドワークにおける調査者の視点・態度を表しますが、読むという作業もまた、誰かの肩越しに何かを見たり考えたりすることではないかと感じました。他者の視点を自己のそれと同一化することはできなくても、客観／主観から少し距離を取り、対象を理解しようと努める態度は、資料を読む際にも有効であると考えています。

また、資料からは人々のつながり方も浮かびあがってきます。それでいて本書のタイトルが「つながり」ではなく「よりどころ」である意味についても、議論を通してあらためて考えました。「つながる」ことには時に重たさや緊張感が伴います（つながることをめぐってはその重たさが必要な場合もありますし、紐帯こそが重要という場面もあるでしょう。それに「ゆるいつながり」「ゆるくつながる」というケースもあるので、つながりも様々だと思います）。ただ、つながることは、そのつながりが切れる可能性を孕み、つながらないものへの排除を生む可能性も持ち合わせています。その点、「よりどころ」はつながりを含みますが、より内向きあるいは一方向的な側面があると言えます。それでも、閉じた形ではない「つながり」を、あるいはつながっていなくても大丈夫であるということを、故郷から離れても生きていかなくてはならない人々を支える「何か」を、どうにか表せないかと思っていた時に浮かんだのがこの言葉でした。本書には多くの課題が残されていますが、参加してくださった方々とたくさんの言葉を交わす中で、「よりどころ」はこれからも自分の研究の要になっていくであろうと感じています。

貴重な場にお呼びくださった東北大学大学院国際文化研究科の皆様と、たくさんの質問をくださった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

5. コロナ禍の日本における中国人留学生の経験と「よりどころ」（王霄漢）

月野氏の研究や今回の講演でも、「よりどころ」は重要なタームの一つとなりました。これに関して、日本でコロナ禍を経験した中国人留学生として考えたことを、最後に書かせていただきます。

月野氏による「よりどころ」や在亜沖縄県人連合会の話を聞いた際に私の頭に浮かんだのは、私がよく通っている仙台の中華料理屋でした。その店は中国人が経営する所謂「本格的な中華料理専門店」であり、そこで感じる「故郷」の味や匂い、店内で飛び交う母国の言葉は私を癒してくれます。またメニューにない料理を直で頼み、周りを気にせずに中国語で談笑できるその店は私にとって「ホーム」のように感じる場所であり、約 6 年前に始まった日本での留学生活における「よりどころ」であったと言えるでしょう。

しかし 2020 年 3 月に未曽有のパンデミックが起こり、感染対策のためにステイホームとソーシャルディスタンスの維持を余儀なくされました。その間、インターネットを通して母国の家族や友人とやり取りはできましたが、孤独感はなかなか解消されませんでした。そうしているうちにパンデミック宣言から暫く経ち、マスク常着や飲食店でのパーテーションの設置といった感染対策を講じながら社会は徐々に元の姿に戻るようになりました。

一方で、私が中国に帰国することは一向に出来ない状況が続きました。便数の少なさや航空券の価格高騰、中国到着後の隔離措置、帰国後に再び日本に戻って来られるか分からないという不安があったからです。

そうした「故郷」との断絶や寂しさを感じた時にも、先に述べた中華料理屋が私の精神的な支えになっていました。店での会話の中心はコロナであり、海を隔てた先にある実家の状況を常に心配していましたが、その店で「再会」できた「故郷」の味と匂いは、私が家族と「つながっている」のだと感じさせてくれました。

平常な生活を取り戻せた現在、新しく仙台に来た中国人留学生に美味しい中華料理屋を知らないかと聞かれた時に、私はこの店の名前を出すようにしています。この店は私だけでなく、友人や後輩たちにとっても「よりかかる」ことのできる、大切な場所であり続けているのです。

故郷を離れ、長い船旅に耐えて異国の地に立ち、様々な不安を抱きながら懸命に生きた在亜沖縄移民たちの暮らしは、それぞれに「よりどころ」があったことで、どうにか維持できたのであり、その心理・経験は移民、アルゼンチン、沖縄に限られた現象ではないと月野氏は述べました。その説明は、コロナ禍での留学生活を経験した私にとって大変納得のいくものでした。

高橋氏も述べたように、「よりどころ」は全世界の人々がコロナ禍を経験した今こそ我々が考え共有していくべきテーマではないでしょうか。在亜沖縄移民をめぐる今回の講演は、そうした「よりどころ」に関する今後の議論や国際文化学の発展に寄与すると考えます。

そしてこのような講演会の開催は、日本国際文化学会の研究会助成によって実現できました。日本国際文化学会には、改めて、深く感謝申し上げます。

月野氏より「新垣ちんすこう」、京都大学の参加者より「京茶ラスク」の差し入れがありました！

講師および運営（左から 阿部純、月野楓子、王霄漢、小山あゆみ）

在亜沖縄移民について様々な角度から議論が行われました！

ご参加いただいた皆様、ありがとうございました！